

SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.05
2018.02

海の理想郷をめざして

Take Free

海の理想郷をめざして

文・石川小夏、片山久美



PHOTO:YUKIO SAWATO

寒さが少しだけ和らいだ2月の土曜日の朝。

鎌倉小町通りの老舗カフェ「イワタ珈琲店」で大きな背中をゆっくりと傾けながら美味しそうに紅茶をすする男性がいる。

山田海人。

その優しい笑顔と穏やかな口調からは、かつて開拓者として命を賭して海に潜り続けてきた姿はとても想像できない。

少年のままのキラキラした目と、多くの苦難を乗り越えてきた強い眼差しが同居する今年74歳を迎えるピーチコーマー、山田海人の激動の人生に迫った。

海に明け暮れた少年時代

鎌倉生まれ、鎌倉育ち。1943年、北鎌倉で山田は生まれた。

「先々が福沢諭吉さんと知り合いで、明治15年頃は生糸の輸出、貿易を行っていました。横浜の日本大通りに生糸商店がありましたが、世界恐慌で商店がつぶれ、父は別荘のように使っていた北鎌倉の家に移ったと聞いています」

幼少の頃、釣り好きの父と一緒にハゼを釣ったり泳ぎを学んだり、鎌倉での毎日は海が中心。「アカテガニを追いかけて搜索願を出されたこともあるほどずっと海にいて、海が遊び場でした」

そんな生活を続けているうちに、将来の仕事は「海しかない」と思うようになっていった。「海のことを学びたい」という漠然とした思いのまま、日本大学農獣医学部水産学科（現在の日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科）へ入学。「東大や水産大の教授が集められてできた学部で、有名な先生の授業をたくさん受けられました」

大学1年の実習では、江ノ島水族館や上野動物園水族館などで働いた。

「給料はなかったけど、やることはたくさんありました。水族館では水槽を洗ったり、魚の死骸を処理したり。水族館で展示する魚を捕りに三浦の海に潜ったこともあります。当時珍しい水中カメラを使って見る海はいつもよりワクワクしました。動物園では、女性の獣医さんに言われてトカゲを羽交い締めにしたたり、ワニや毒蛇にエサをやったり(笑)。たくさん怒られたけど楽しくてしょうがなかった」

山田はこうした経験から、沖縄や奄美大島などにも旅行し、大学卒業後は水族館で働くことになるのかなど漠然と思っていた。

太平洋のど真ん中に広がる世界

転機が訪れたのは大学4年生の時だった。

大学で海洋実習のための実習船ができ、ハワイ、メキシコを調査する約30名の海洋実習のメンバーの学内選考が始まった。優先的に選ばれたのは漁業を専攻している学生だったが、山田は、この時、その後の彼の人生を左右する幸運の切符を手に入れる。

「私がやります!」

空きができた実習メンバーに名乗りを挙げた。当時4年生。就職活動はほったらかしで無我夢中で太平洋へ飛び出した。

「船上では夜になると、星の中に人工衛星が光って移動

して行くのが見える。水面が凪っていて、海面に星がキラキラ映っている。本当に美しい世界なんです。太平洋のど真ん中で、トビウオや海鳥と同じ目線で泳ぎました。泳ぎは自信がりましたが、水深4,000mと聞いたときはさすがに筋肉が硬直してうまく泳げま



せんでしたね(笑)」

この経験が山田を、「水族館」という箱の中の世界から、広大な海の世界へと誘っていったのだ。

就職、そして挑戦

就職先は、海中開発技術協会。潜水技術の研究や潜水士の講習を担う社団法人

である。職員は専務理事と新入社員の自分一人。「東京水産大、小湊実験場などでダイビングの講習会をやりましたが、当時はダイビングがブームで女性の受講生もたくさん来ましたよ。格式のある大学の先生が講師として来てくれて、先生方からシャワーのように色々なお話が聞けて幸せでした」

山田はここで、法人の事務局として講習会の受付や運営などを任されていた。事務仕事だけでなく、ハンス・ハスの講演会のお手伝いをしたり、ダイビングをしたり泳いだりと、順調な社会人スタートとなった。

そんなとき、山田に2度目の転機が訪れた。シートピア計画への参加である。1968(昭和43)年、海洋開発は宇宙開発・原子力開発と肩を並べるビッグサイエンスとして労働省から科学技術庁に移管された。科学技術庁は、アメリカの「シーラブ計画」やフランスの「プレコンチナン計画」など、当時、海洋先進国が競って開始した海中居住実験計画「シートピア計画」を行うことになったのである。

シートピア計画とは、その名のとおりのsea(海)のutopia(理想郷)を目指したもの。将来の海洋開発に向けて、水圧の人体に及ぼす影響、海中居住基地の住み心地などの研究開発を行う。いわば「地上の人間が海中へ活動領域を拓げられるか」を実験する壮大な計画である。

山田は当時入社3年目。海中開発技術協会に科学技術庁から予算がついたことから、協会はシートピア計画をスタートさせるため、山田と同世代である24~25歳の新進気鋭のダイバーを日本中から集めてきた。

こうして始まったシートピア計画に山田は、協会職員として参加し、その後、1971(昭和46)年に設立された特殊法人海洋科学技術センター(現在の国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC))の職員として、40歳代後半まで取り組むことになったのである。

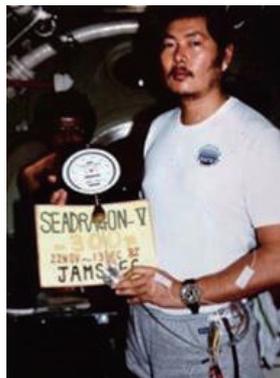
人類は海中に活動領域を拓げられるか

シートピア計画の実験は、4名の「アクアノート」と呼ばれる飽和深海ダイバーが長時間海中居住を行う。この実験は、1972年(昭和47)年から1975年まで行われ、30m(1972、静岡県田子港)、60m(同)、100m(1975、静岡県内浦湾)の各海中実験に成功した。



「日本の大陸棚の資源開発には、大陸棚斜面の水深300mまでダイバーが潜る」ことが必要で、(水深300mは31気圧)に耐えなければなりません。JAMSTECで水深300mの圧力をかける実験室(潜水シミュレータータンク)で実験しました。まず、10時間かけて体を慣らしながら加圧していきます。窒素を吸うと麻酔作用があり、酔ったような状態になってしまうので、呼吸ガスにはヘリウムを入れます。このような条件下で海中作業を行うことができるのかどうかを調べるため、高圧下で豆を箸でつまむ実験を行ったりしました」

「海底の水温は5℃～10℃。その中でどうすれば作業できるかの実験も行いましたね。圧力タンク内での実験後、水中エレベーターでタンクごと海底300mまで行き、そこでタンクから出て深海での潜水作業を行うのです。実験は狭い圧力タンク(DDC)のなかで約20日間行われ、終了後、13日間かけて徐々に減圧を行うという感じです」



シートピア計画の実験は常に危険と隣り合わせである。日本人では水深300mの潜水し成功したダイバーはわずかしかない。海外では、地上での実験中、外の作業員が誤ってタンクの弁を開けてしまったために気圧に変化が生じ、ダイバーがトイレに吸い込まれて死亡するという事故もあった。深海ではシャチに食べられてしまったり、ストレスから精神的にダメージを受けてしまう人もいる。山田は、初島で火山が噴火した時に、火山性微動により海底の振動が船底に当たりドーンドーンという音を聞いたという。

深海ダイバーになった頃に当時外務省に勤務していた女性とお見合い結婚をした。現在の妻である。危険で長期間家を空けるこの仕事のことを、山田は妻に何度も説得して納得してもらったという。しかし、第一子の誕生にも立ち会うことはできなかった。

結婚して子どもも生まれ、一番充実している20代から40代のこの時期に、太陽光も届かない真っ暗闇のなか、なぜ山田は、こんなにも危険な仕事に挑むことができたのか。



「自分の心拍数や脈拍、呼吸数などのデータを取る、ある意味、人体実験のような環境でした。でも、私は、『人類の活動領域を海中にまで拓げてみせる』という使命感に満ち溢れていました。深海でも、上を見れば少しは明るいんですよ(笑)。見たことのない深海生物が周りを泳いでいるし。人類の進化へ貢献できるというこの環境に、感謝の気持ちでいっぱい、辛いという気持ちはありませんでした」

頭上に見える「希望」という光を信じて潜り続けた山田たちの努力は、その後、本州四国連絡橋の架橋工事、潜水艦救難作業等、日本の潜水作業技術の開発進歩に大きく貢献した。

潮騒とフレッシュエアーを感じて

潮騒とフレッシュエアーを感じて

そして今----

「海から来る風は誰も吸っていない新しい空気。私はフレッシュエアーと呼んでいます。潮騒の音を聞き、フレッ



シュエアーを吸うと元気になると思いませんか？」大好きな鎌倉の海を見ながら山田は語る。

63歳で定年した5年後、癌が見つかった。医者からは、「転移もしており、余命は3ヶ月」と言われた。若い頃に数々の体験をし、生き物に関わって来た山田は余命宣告を受けても動じなかった。

「運命は運命として受け入れる」

山田には好きな言葉がある。

「明日死ぬかのように生きよ、永遠に生きるかのように学べ。(ガンジー)」

この言葉を胸に、現役時代からの趣味であるビーチコーミングを続け、大好きな海の魅力を伝えるための原稿を黙々と書き続けた。

「好きなことや楽しいことをやっていると、体が良くなるんですね」。いつのまにか、癌は無くなっていった。医者も驚いたという。

2017年、山田は、「未来の科学を担う子どもたちに海の生態系や環境をもっと知ってもらいたい」と、JAMSTECの仲間たちとともに「NPO法人チームくじら号」を立ち上げた。

子どもたちとともに浜辺を調査しながら山田は語る。

「鎌倉の海辺には、貴重で価値のあるものがたくさん打ち上がります。宋からの青磁、朝鮮半島からの高麗青磁、鎌倉時代のかわらけ、江戸時代の燈明皿などのかけら。これはイルカやクジラの骨です。触ってみて。銀化ピンはガラスピンが化学変化を起こ



したものでとても綺麗でしょう？鎌倉の海は特別なんですよ」。子どもたちは目を輝かせて歓声をあげている。「みんなが見たことのないものを見せてあげたい」。

幼い頃から変わらない、これが山田の原点である。

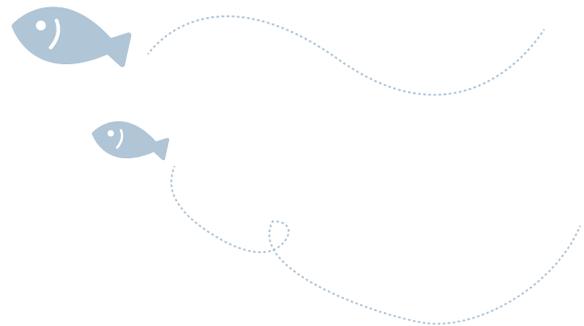
迷いの多い若者たちへのエールを、とお願いすると、

山田は、

「自分が好きなものを見つける。好きなことに貪欲に生きていく。ワクワクを感じるままに追求していく。自分が今いる環境のなかでの経験を大切に楽しく生きていくと、時間の使い方が変化していく。好きなことを見つけた者勝ちですから(笑)」と語ってくれた。

山田の次なる目標は、「鎌倉の海辺で、海を見ながら子どもたちに地球の環境教育をする。地球環境を理解するには、山の頂きでもなく、草原でもない、地球上の97%の水は海にある。命の水と出会えるのは海辺ではない」と語る。

その目は、かつて海中に海の理想郷を作ろうと数々の実験に立ち向かった若き日の山田青年のものと同じ輝きを放っていた。



「第3回うみの環境しらべ隊～由比ガ浜海岸冬編～」を開催しました

2月11日(日)、冬晴れの鎌倉・由比ガ浜海岸で雨天が心配された中、「第3回うみの環境しらべ隊～由比ガ浜海岸冬編～」を開催しました。当初は雨天が心配されましたが、当日は気持ち良い冬晴れ。10月28日に開催した「秋編」のときは生憎の雨で海岸調査ができなかったため、今回は見事リベンジを果たすことができました!

当日の参加者はスタッフを合わせて約30名。今回も湘南ビジョン研究所のメンバーがスタッフとして楽しくお手伝いをさせていただきました。

海岸調査は、参加者が4グループに分かれて、10メートル四方に砂浜を区切って、その範囲内で落ちている漂着物を収集するもの。制限時間は20分間!

参加してくれた子どもたちは、親御さんと共にしゃがみこんでタバコ、ビニールヒモ、BB弾、ビニールの破片、木炭や石炭などを拾い、それを種類別に分けて、チームごとにその種類と数を報告書に記載しました。その結果、総計962個、その7割以上(686個)がプラスチックゴミでした。

海岸での活動後、由比ガ浜公会堂に移動し、各グループを代表して4人の子供たちが活動成果を発表。指導者としてご参加いただいた鎌倉市環境教育アドバイザーの山田海人先生からは、由比ガ浜海岸の漂着物の特徴や、ビーチの宝石「銀化ピン」についてお話いただきました。

また、海洋汚染問題に詳しい東京海洋大学名誉教授の兼廣春之先生からは、プラスチックごみの化学的な特性について分りやすく講話いただきました。最後に海洋研究開発機構(JAMSTEC)海洋生物多様性研究分野シニアスタッフの加藤千明先生には、プラスチックの比重による分類実験を行っていただき、子供達からは活発な質問が出され大盛り上がりとなりました。

スタッフ一同、「子どもたちに海岸の未来を考えて欲しい、ポイ捨てをしない人に育って欲しい」と願いながら、無事に調査活動を終わりました。次回もお楽しみに!

(文・上田佳苗)



湘南ビジョン研究所に インターン生が来てくれました!

湘南ビジョン研究所にインターン生が来てくれました!

文教大学3年の石川小夏さんが湘南ビジョン研究所にインターンに来てくれました。石川さんはいつも笑顔で誰とでも仲良くなり、何事にも果敢にチャレンジするガッツのある学生さんです。さっそくインターンでは、本号の特集記事のインタビュー取材と原稿執筆、小学生への環境教育学習のサポートなど、大活躍してくれています!石川さん、これからもよろしくお願いします!
(文・片山清宏)



文教大学国際学部国際理解学科3年 石川小夏

1996年山形県に生まれました。(21歳)

小学一年生の頃からガールスカウトの活動をしています。このガールスカウトの活動では、街頭に立ちユニセフ募金をしたり、世界の子供たちについて学んだりする中で、世界には私たちのようにご飯を3食食べられて、学校に行くことができるということがあたりまえではないことを知りました。「もっと世界について知りたい!私にできることを考えたい!大学では「国際協力」を学びたい!」と考え、文教大学の国際学部に進学しました。

憧れの大学生活は驚きの連続でした。ネイティブの先生と流暢な英語で話す人、海外にボランティアをしに行く人、留学経験豊富で前髪をかきあげちゃうような人。対して私はパスポートもなく、何となく引け目に感じていました。

そんなももやした気持ちを消したくて、大学一年生が終わった春、私はミャンマーに行きました。2週間のミャンマー研修では、自分で流すトイレ、お風呂はなく、太陽の下での水浴びシャワー、ご飯もミャンマー式の生活を送りました。電気がない中で足元を照らす星空の輝きは忘れられません。

それまで、物質的に満たされていることが豊かだと思っていましたが、豊かさはもっとシンプルで、だれかと笑顔でいられることなのかもしれないとミャンマーでの生活が気づかせてくれました。また、地域の特色やそれぞれの文化を尊重し少数に目を向ける大切さを知りました。ミャンマーに行き少しではありますが世界を見たことで、日本が見えてきました。

その後「think globally act locally」をモットーに地域での活動にも取り組んできました。そこで先月より、インターンとして湘南ビジョン研究所に参加させていただいています。残り1年ですが、夢の湘南ガールになれるように、湘南の魅力を湘南の面白さを再発見していきたいです!どうぞよろしくお願いします!

モットー:自分の周りにいる人を笑顔にすること!いつかその笑顔の輪が広がって世界中を笑顔にすることが私の野望です。

趣味:ラジオを聴くこと。散歩をすること。カフェめぐりが好きで素敵なカフェを見つけたときに幸せを感じます。
(文・石川小夏)





let's have fun!
配布・設置していただける
場所を募集しています

湘南にお住まいの

『まだ波に乗った爽快感を知らないあなたへ』

お手軽・簡単ボディボードで茅ヶ崎の波に乗ってみませんか？

20年前に湘南でブームになったボディボード。当時は若い女の子が主にやっていたボディボードが年々幅広い層に支持されてきています。

小学生からシニア世代まで親子3代で楽しめる海のスポーツに成長しました。

しかも最近体験される方は小学生やシニア世代が多い50代、60代からボディボードを初めて体験される方が多いです。



2017年夏からボディボードを始めたTさん

生まれも育ちも湘南なのに一度も波に乗った事が無く66年が過ぎた。66歳からボディボードやるなんてって周りには言われたが波に乗ってみたい気持ちが勝った。

サーフィンも考えたがボードが大きいし、いきなりボードの上に立つのは難しそうだったから、まずは簡単そうなボディボードから挑戦したという。



体験スクールで波に乗る感覚を掴む事が出来て、スーッと波に乗る爽快感を感じる事が出来た。しかし毎回違う波で、なかなか波が自分の思うように言うことを聞いてくれないし、波に翻弄される事が凄く新鮮で面白い。

Tさんは波乗りの魅力にどっぷりハマリ真冬も続け、海で四季を感じながら少しでも長く波に乗ることを目標にしているという。



波に乗ってみたいあなたへ

ボディボード体験スクールで波に乗ってみませんか？

サンタートルでは茅ヶ崎サザンビーチ周辺で小学1年生からボディボードスクールを実施。10,000人以上のスクール実績と専門店としての確かな知識とスタッフが優しくサポートします。

ボディボード専門店サンタートル

電話：0467-58-5827

住所：〒253-0055 茅ヶ崎市中海岸3-11-24